

普段の遊びの中に芽生える個の育ちと集団としての育ち～保育の振り返りを通して～

問題提起者：中村有沙（山梨県 双葉甲府幼稚園 教諭）

1. はじめに

幼稚園では、様々な生活環境を背景に、感じ方や考え方の違う子どもたちが出会い、生活する。その中で仲間と触れ合い、自分の思いを主張し、ぶつかり合い、折り合いを付ける経験、互いに認め合う経験を積み重ね、集団の中で一人ひとりが自分らしさを発揮していけるようになると思う。

本研究では、保育者から見ると、友だちへの興味や関心がまだ薄いのではないかと感じられていた園児に着目し、仲間と作り出す遊びの中で育つ姿を追った。そして、職員同士で園児や遊びの様子を伝え合い、子どもの育ちを捉え直してみた。

2. 実践

対象：2017年度 年中時、2018年度 年長時（男児10名 女児7名、進級時クラス替えなし）

《対象児 R 児》

日々の支度や食事を始め、物事に取り組むときにマイペースだった。新しい活動や環境では不安が強く、行動に移すまでに時間がかかる時があった。保育者に対しては比較的自分の思いを伝えられるが、友だちに対して自分の気持ちを伝えることが難しい時があった。動く順番や物を置く位置など、こだわりを持っている面もあった。R 児の母親は、R 児のこだわりが強い面やマイペースな面を気にかけており、保育者に相談することが度々あった。

《クラスの様子》

クラス活動として集団でのゲーム遊びをする時には、子どもたちは保育者が示したルールを受け入れ、守りながら友だちと一緒に楽しく遊んでいた。友だち同士で意見を出し合って、作戦を立てたり、あるいはルールの枠を超えて遊ぼうとしたりする姿はあまり見られなかった。中心となり主導権を握ってゲームを展開させていく子どもの意見のみで遊びが進んでいくことが多く、他児はそれを文句なく受け入れてしまう様子であった。

《保育者の願いと思い》

R 児には、物事に意欲的に取り組んだり、自分の気持ちを言動で友だちに伝えたりしていけるように、自分の力に自信を持てるようになってほしいと考えた。クラスの課題としては、保育者や友だちの提案に対してそのまま受けとめて取り組むのではなく、一人ひとりが主体的に取り組んで自己表現していけるようになってほしいという願いを持った。

そのためには、R 児やクラスの子どもたちにとってはクラス全体の活動よりも自由遊びの中の方が、自分の思いを出しながら自己発揮していくことができるのではないかと考えた。

【事例1 僕を引っ張って！（2017年12月5日）】

この時期、クラス全体が忍者や宇宙人になりきって楽しく遊んでいた。R 児を含め、クラスの友だち同士が言葉でやりとりをしながら力を合わせる楽しさを経験してほしいという思いから、物語「大きなかぶ」を題材にしたゲーム遊びを行った。R 児が物を運ぶ時に発する「えっさー！えっさー！」という掛け声があり、それが物語に出て来る「うんとこしょ、どっこいしょ」という掛け声に通じるところがあるのではないかと、新しいゲームへの親しみやすさを生むのではないかと考えた。

ゲームでは、抜かれないように踏ん張る子どもが多い中、R 児は腕の力を緩めて抜いてもらおうとしていた。また、抜くチームにいる時は、物語に出て来るおじいさんになりきっていた。その後、自由遊びの時間にもこのゲームを楽しんでいる子どもたちがいたので、お遊戯会では「大きなかぶ」の歌を振付を交えて発表するこ

とにした。子どもたちが前を向いてかぶを抜く動きをする中、R 児は隣の友だちの前に出て背を向けて立ち、“僕を引っ張って”と言わんばかりだった。

→ 自分のイメージを自由に表現できる R くん

R 児は友だちと力を合わせて抜かれないようにするよりも、自分がかぶとして抜かれることに楽しさを見出していた。また、おじいさんになりきることが楽しいらしく、翌日、朝の会でお当番さんとして前に出る時には腰を曲げて歩きながら登場し、大きなかぶのおじいさんになりきっていた。型に嵌らずに自分のイメージを自由に表現できる場所は R 児の良いところであると感じた。今後、R 児が自分のイメージを表現することで、友だちの遊びと同じ方向に向かうと良いのではと考えた。

【事例 2 水たまりを使っの川作り (2018 年 1 月 18 日)】

冬の寒さが続く中、たまたま暖かい日があった。前日に降った雨でできた水たまりで、男児 7 名が川作りをしていた。各々掘りたいところを掘ったり水を引いたりして、“橋を渡す”“トンネルを置く”ことを友だち同士で楽しんでいたが、アイデアを出し合って遊ぶというよりは、時々一緒に川を作り、すぐに各々の川作りに戻るといった様子であった。その中で、R 児は保育者が濡れないようにと水たまりの中に大きいカゴを置き、椅子を作ってくれた。水たまりの中に座れる面白さに周囲の友だちも興味を示したが、「これをトンネルにしよう」と S 児が提案すると、カゴの見立てが椅子からトンネルへと変わった。周囲の友だちは S 児に何も言えなかった。

【事例 2-2 会話を通して友だちとつながれたら・・・ (2018 年 4 月 17 日)】

年長組に進級後、Y 児が掘り始めた水路がきっかけとなり、R 児を含め、クラスの男児数名で再び川作りの遊びを始めた。各々好きなところを掘ったり橋を渡したりしながら川を大きくしていた。遊びが広がる中、年長児の川作りが気になっていた様子の年中児 T が、R 児が作った橋に興味を持った。

年中児 T は、水の流し方や遊びに必要なおもちゃについて R 児に尋ねるが、R 児は聞こえない素振りを見せたり、目を合わさずにつっけんどんに答えたりしていた。

→ 大切なのは R くんが「話したい」と思うまで待つこと

みんなのアイデアの面白さが伝われば、R 児もますます遊びが楽しくなっていくのではと思った。R 児がアイデアを出し、それに友だちが興味を持ったことが嬉しい場面であったが、それぞれが自分のやりたいことを楽しみ、遊び方が広がらなかった。そこで、楽しさをみんなで分かち合えるよう、特に R 児のアイデアがみんなから「いいな」と言ってもらえるよう、保育者が間に入っていこうと考えた。

事例 2-2 では、R 児が会話を通して友だちに考えを伝えられるように保育者が積極的に間に入ったが、R 児は会話の中で友だちからの言葉に返事をしなかったり、聞き流しているような素振りを見せたりした。このことから、R 児にとっては、友だちに自分の考えを認めてもらい遊びの楽しさを分かち合うことよりも、自分の世界に入り込みたい・遊び込みたい気持ちの方が強いのではないだろうかと考え直した。その時期の R 児が自分の考えや思いを言葉にして友だちに伝えることが苦手なのだとしたら、R 児が友だちと会話できるように間に入るのではなく、R 児自身が「話したい」と思うまで待つことが大切なのではないだろうか考えた。

【事例 3 友だちのアイデア (2018 年 4 月 20 日)】

川作りに集まった子どもたちが、各々バケツやじょうろで水を流したり水路を作ったりしていた。水路がさらに伸びたり、異年齢の子どもも年長児を真似て水路を掘ったりしたので、川が日に日に大きく広がっていった。その中で、Y 児が「そうだ、上から川を見てみよう!」と提案し、近くにあるジャングルジムに登って川を眺めた。その様子を見た R 児も「R も見てみたい!」と言ってジャングルジムに登り、「おー、すごいね!」「すごいね!」と喜び合っていた。

その後、R 児は「トンネルだよ」と言って、裏返したカゴを水路の上に置いた。それを見た Y 児は「よし、休憩しよう！」と言ってカゴの上に座った。急に座った Y 児の様子に驚き、黙ったまま Y 児を見つめる R 児だったが、その後一緒に座り、「ここで休憩できるよ！」と近くにいる年中児に声を掛けた。

【事例 3-2 もっと長くなればいいのに！ (2018 年 4 月 24 日)】

R 児と年中児、年少児数名が各々川作りをしていた。一人で黙々と水路を掘っている R 児の傍で、保育者と年中児 T が「川が長くなってるね！」「本当だ！でもお水がここで止まっちゃってるよ？」「じゃあ、掘ればいいじゃん！」などと言いながら、水を止めている土を掘って、「ほら、流れた！」と喜んだ。

保育者はそれまでの省察を受け、R 児と友だちが会話するように意図的に仕掛けるのではなく、R 児と周りの子どもたちとがお互いの存在を少しでも意識できればと思い、その先を掘っている R 児を見据えながら、「R くんが掘っているところまで流れていくかな？」と呟いた。T 児が保育者の呟きを聞いて、「もっともとお水があるね！道ももっとももっと長くなればいいのに！」と言ったので、保育者は、「それ面白そうだね！R くん、R くんが作った川に水を流してもいい？」と R 児に聞いてみた。R 児が「いいよ」と答えたので、T 児と一緒に水道と川を往復して水を流した。

しばらくして R 児を見ると、中腰になり素早く川を掘り進めていた。T 児は長くなった川を見て喜び、周りにいた他の年中児たちと一緒に、各々好きな位置から水を流していた。R 児は水路を掘り進めながら時々振り返り、その様子を眺めていた。R 児の姿を見て、保育者が「もしかして、すみれさん(年中クラス)が川を長くしてって言ったから、急いで作ってくれたの？」と聞くと、頷いた R 児であった。

→ “関わる” って何だろう？

R 児について、“自分の世界で遊び込むことが好きな時期である”と捉えていたが、R 児の遊ぶ姿を見ると、友だちの意見を受け入れる場面もあり、周囲の様子や声に気付いていることが分かってきた。R 児は一人で遊び込んでいるのではなく、R 児なりに周囲と関わって“友だちと一緒に”川を作っていたのだ。それならば、R 児が友だちを意識して行動した瞬間を見逃さず、その行動の中にある R 児の思いを汲み取っていきたいと思った。

【事例 3-3 ぶつかり合いから生まれたアイデア (2018 年 5 月 16 日)】

R 児と Y 児は、登園して支度を終わるとすぐに川作りを始めた。園庭を広く使って水路を遠くまで伸ばして遊んでいた R 児に、ふと目を向けると泣いていた。隣には Y 児の姿があった。

保育者が二人に尋ねると、川を遠くまで伸ばしたいという R 児と、遠くまで伸ばすと他の友だちが濡れて通れないという Y 児の主張がぶつかり合った様子だった。

二人の様子を気にしてクラスの子が集まっていたため、保育者はその子たちにも聞こえるように、「どうしたらいいかな？」と問いかけてみた。すると O 児が「じゃあ、橋は？」と提案し、J 児は橋になりそうなおもちゃを取りに行行って R 児が作った川に橋を渡してくれた。保育者が「R くん、Y くん、これならどうかな？」と尋ねると、黙って頷く R 児と、「うーん…やってみてもいいよ！」と答える Y 児であった。

→ぶつかる思いを合わせるには

川作りの遊びに入っていなくても、クラスの友だちが熱中して盛り上がっている遊びを把握しながら、それに合った意見を出し、その場を解決しようとして考えを提案する子どもがいた。川をつなげたいという R 児の思いと、他の友だちが濡れて通れないからつなげたくないという Y 児の思いの双方を汲み取りながら、“橋をかける”という解決策を考えた O 児や J 児の育ちが見て取れた。R 児と Y 児にとっては、友だちのアイデアを受け入れ、それまで譲れなかった気持ちを収める経験になったと思った。

【事例 4 みんなでやろうよ (2018 年 5 月 28 日)】

登園した R 児が、クラスの女児数名を「一緒に川を作ろう！」と誘っていた。他の遊びをするからと女児たちに断られた R 児だったが、「みんなでやろうよー」と呟いていた。

数日後の自由遊びの時間、男児数名が砂場で穴を掘り、水を運び入れて温泉作りをしていた。片付けの時間になったが、子どもたちはまだ作り込みた様子だった。R 児の呟きを生かせる機会でもあったので、計画していたクラス活動を変更し、クラスみんなを誘って温泉作りを試みることにした。

その中で R 児は、水を入れた大きいバケツを一人で運んでいる友だちに「大丈夫？」と駆け寄り手伝っていた。遊んでいるうちに、R 児は砂に足を埋めることが楽しくなった様子で、水が溜まっていない陸地部分に穴を掘って自分の足を埋めて遊ぶようになった。陸地の周りに水路ができそうだと考えた保育者は、「もう少しで川ができそうだね」と呟いた。すると、R 児と女児二人がシャベルを手に砂を掘り始めた。陸地部分を一周し、水路がつながると R 児は、「これ、R がやったんだよ！」と保育者や友だちに誇らしげに話していた。

→R くん、アイデアを出す

クラス全員で温泉を作る中、R 児は保育者の呟きから川作りのイメージを膨らませ意欲的に取り組んだ。R 児は、自分が掘り始めた水路に友だちが水路をつなげたのを見てさらにイメージを膨らませ、「行き止まりにしたら？」「アリさんの橋にしたら？」と、アイデアを出す姿が見られた。普段の川作りで見られた R 児の豊かなアイデアが発揮される機会になったと感じた。R 児は、友だちとのやりとりで言葉の数は多くないが、みんなが集まった温泉づくりを楽しんでいるということが感じ取れた。

【事例 5 秘密の特訓 (2018 年 10 月 3 日)】

10 月 2 週目に行われる運動会では、障害物競争（跳び箱、鉄棒前回り、平均台など）やリレー、組み立て体操の発表をすることになった。クラス全体では、鉄棒や組み立て体操で様々な技に挑戦し、自由遊びの時にもオリジナルの技を考えながら保育者に披露していた。R 児は跳び箱で「4 段跳びたい！」などと意欲的に取り組んでいたが、鉄棒に対しては苦手意識があるようで、自分から積極的に挑戦しなかった。新しく挑戦することに対して不安が強く、行動に移すまでに時間がかかる R 児に、苦手なことにも挑戦する勇氣を持って欲しい、挑戦することによって自信を付けて欲しいと思った。鉄棒の前回りは、段階を踏みながら毎日少しずつ取り組めるように声をかけた。「友だちに見られると恥ずかしい」と R 児が言ったので、保育者と二人で鉄棒の“秘密の特訓”を行った。

ある時、クラスの子ども数名が鉄棒で遊んでいるところに R 児が通りかかった。保育者が R 児に、「R くん、前回りできるようになってきたよね！見せてほしいな〜！」と話しかけた。「できるかな〜？」と鉄棒をつかむ R 児に保育者が手を添えて補助をすると、ゆっくりではあるが回ることができた。その様子を見ていた K 児（女児）が「R くんすごいね！あと少しでできそう！」と R 児を励ますと、R 児は「うん」と答えて、照れながらも嬉しそうにしていた。

【事例 5-2 次はもっと速くできるよ！ (2018 年 10 月 5 日)】

競争やゲームの勝ち負けについてあまり興味がないように思われる R 児は、年中の頃からしているリレー遊びでも、友だちと競うというよりは少しおどけながら力を加減して走っていた。

運動会への取り組みも盛り上がってきた頃、リレーでは R 児のいる赤組が毎回負けていた。そこで、チームごとに作戦会議を行い、トラックの内寄りを走ることや一人ひとりが全力で走ることなどを話し合っていた。作戦会議をしている時の R 児の表情は暗く、どこか気まずい様子で地面を見つめていた。その後、全力で走り切れるように保育者が励ましながら伴走して練習を重ねていくと、R 児はいつもより真剣な表情になり、追いつかれないようにと全力で走るようになっていった。両チームの差は徐々に縮まっていき、7〜8 回目の勝負で初めて赤組が勝つことができた。いつもは相手と差がついて毎回リードされていた R 児だったが、その日は R 児が少しリードをして次の友だちにバトンを渡すことができた。走り終わった後、相手チームの K 児（女児）が「R くん、なんか前より早くなってるよね。すごくない？」と、保育者に話しかけた。R 児は K 児が保育者に話す様子を近くで聞いていて、とても嬉しそうな様子であった。その一度勝てた日を境に R 児の走り方やリレーへの意気込みが変わり、リレーの勝負をする前には「今日は 1000 パーセントで走るよ！」

「次はもっと速くできるよ！」と、保育者に話すようになった。次第に、R 児はリレーの勝負で全力で走る姿が見られるようになった。そのことから、R 児は自分の頑張りに気付いて認めてくれる友だちの中で、自分の力を発揮するようになったと感じた。

→友だちあつての「できる」

母親の話によると、R 児は跳び箱や鉄棒で目標が達成できたことが嬉しかったようで、毎日できたことを母親に報告することが多かったとのことだった。運動会の取り組みでは、友だちの姿を意識する様子や、友だちに勝ちたいという R 児の思いも見て取れるようになった。R 児はいつも声をかけてくれる K 児の言葉に励まされ、「できるようになったんだ」「次はもっとできる」という思いが芽生え、やればできる自分に気付くことができたのではないかと感じた。

【事例 6 いーれーてー！！（2018 年 11 月 15 日）】

クラスでは、自由遊びの時間に 4～5 名の男児が警察ごっこや消防ごっこをして楽しく遊んでいた。その遊びを仕切っているのは警察やパトカーが大好きな Y 児で、その知識を生かしながらパトロールをしたり、長縄跳びをホースに見立てて消火したりと、工夫して遊んでいた。しばらくすると、R 児の「もう！！なんで！！R もやりたい！！」という大きな声が聞こえてきた。話を聞くと、R 児がその遊びに加わろうとして Y 児に「いーれーて！」と声をかけると、「だめ」と言われてしまうとのことだった。保育者が Y 児に理由を聞くと、「だって R くんが、もう Y とは遊ばないって言うんだもん。だから一緒に遊びたくなくなった」と答え、その言葉に「だって Y くんがいてくれない」と返す R 児であった。R 児と Y 児の思いを聞いて、次はどうしたらよいのかを話し合い、自分が言われて嫌なことは言わないこと、友だちの声や話に耳を傾けながら遊ぶことを確認して一緒に遊び始めるが、R 児が「Y くんがいてくれない」と再び保育者の元にやってきた。

→主張する R くん

以前の R 児であれば、友だちに言い返したり、自分の思いを主張したりする姿はあまり見られず、すぐに保育者に助けを求めていた。大きな声で叫ぶようにではありながらも、「自分はこうしたい」「なぜだめなのか」という思いを友だちに主張できるようになったことに、R 児の変化が感じられた。一緒に遊ぶことを断られて遊びをやめてしまうのではなく、Y 児と一緒に遊ぶにはどうしたらよいのかを考え、友だちに自分の思いを伝えられるようになったことを嬉しく思った。

【事例 7 スコップない……（2018 年 12 月 20 日）】

自由遊びの時間、砂場で年長児 2～3 人を中心に温泉づくりが始まった。その様子を見て他の年長児や年中児、年少児も徐々に遊びに加わり、遊びの輪は 10 人以上に広がっていた。R 児は大きなスコップを手に穴を掘ったり、じょうろやバケツに水を汲んで穴に流し入れたりしている様子があった。

しばらくすると、R 児が「スコップない…」と、それまで使っていたスコップを探していた。その様子を少し見守っていたが、すぐに R 児が保育者に「R が使ってたスコップがない」と伝えてきた。「どこに置いたの？」と尋ねたり、「他にスコップがないか探してみる？」などと提案したりするが、R 児は黙り込んでいた。すると、R 児がスコップを探していることに気付いた年長児の男児 J が「R くんの、K くん(年少児)が使ってるよ」と教えてくれた。保育者が「K くんに聞いてみよう？」と、温泉づくりをしている K 児に聞こうと提案するが、R 児は再び黙ったまま K 児の姿を真後ろから見つめているだけであった。

友だちに対して自分の思いを主張できるようになってきた R 児なので、K 児と直接やりとりできるようにと保育者が間に入りながら会話を促してみるが、R 児は自分から話すことはなかった。しばらく沈黙が続いた後、R 児の様子に気付いた K 児が「……使ってたの？」と聞いた。R 児は頷き、K 児はすぐに R 児にスコップを渡した。K 児がスコップを返してくれてからは、R 児は意気揚々と温泉づくりに戻り、年長児の友だちと一緒に穴を掘り進めて遊び続けた。

→R くんが自分の思いを出せる“場”

R 児は、年少時から同じクラスで過ごす友だちに対しては自分から話しかけたり自分の気持ちを伝えたりしているが、以前からの遊びの様子を見ていると、年中児や年少児など他学年の友だちに対しては自分から話しかけることがほとんどなかった。しかし、運動会を終えた頃から、R 児は口調が強いながらも自己主張することが多くなったので、遊びの場面で他学年の友だちに対してどのように関わっていくのか期待して見ていた。だが、事例での R 児の姿を見ていると、R 児にとっては“同じ遊びを楽しむ集団”よりも、“二年半以上を一緒に過ごしてきたクラスという集団”の方が、安心して自分の思いを出すことができる場なのだと改めて感じることとなった。

温泉づくりで R 児は、同じクラスの友だちがバケツを運んでいる姿を見て「それ、ひとりで持てる？」と言い、駆け寄って手伝っていた。振り返ってみると、一学期には自分の楽しいと思うことに夢中で遊び込んでいた R 児だが、最近では遊びながらも周りの友だちに目を向け、力を合わせたり遊びを提案したりして、一緒に遊びを楽しもうとする姿も見られるようになっていた。R 児なりに周りの友だちに対する関わり方が変化し、遊びの場が広がってきていることが感じられた。

【 まとめ 】

当初、私たち保育者は、R 児が友だちと関われるようになるには、大好きな遊びと一緒に楽しめるようになることが大切だと考えていた。R 児は、まず大好きな川作りを自分のもの(自分の力でできたこと)にしていき、その場所で同じように川作りを楽しむ友だちがいたことに気付いた。この時期に、R 児に“友だちと関わると楽しい”という思いが芽生えたのではないと思われる。保育者が子どもたちの面白い発想をクラス全員に紹介したことをきっかけに、クラスの友だちから「みんなで力を合わせればもっと川が大きくなる」という声があった。その後、実際にみんなで川作りを続けていく過程で、R 児が「みんな聞いて」と呼びかけてから話し出す姿や、降園する際にクラスの友だち一人ひとりに「バイバイ」と言って帰る姿が見られるようになり、R 児の言葉の中に「みんな」という単語が多く出てくるようになった。

R 児が集団の中にいて力を生かせるように、担任だけでなく複数の保育者が連携を取り、R 児の姿をありのまま受けとめ、気持ちに寄り添いながら思いに応えていける保育を心掛けた。その過程で、R 児にとっては同じ遊びをしている子が“友だち”になるわけではないのだと気付いた。R 児にとっては同じ遊びを楽しむのではなく、“同じ時間を一緒に過ごして(生活して)きた”ことが土台としてあるのだと考え直した。安心できる場(クラス)があり、その中で同じ楽しさを分かち合える子が R 児の“友だち”なのだと感じた。

年中時には、クラスの子どもたちは R 児を年下の子のように感じ、接している姿があった。しかし、遊びの中で R 児が自由な発想を持って遊んでいる姿が多く見られるようになっていたり、アイデアを友だちに提案したりするようになったことによって、周りの子どもたちも R 児の得意なことや頑張る姿に気付き、同じ目線で接するようになっていったのではないと思う。

クラスの他の子どもたちの様子を見てみると、友だちの思いや考えを受け入れながら、より遊びを楽しもうと工夫したり、時にはぶつかり合いながらも意見を言い合ったりする姿が多くみられるようになった。

事例 4 のように、大変なことや難しいことは友だちに助けを求めたり、反対に友だちが困っている時は手伝ったりする場面もあり、仲間としてのつながりが生まれたように感じられた。「○○くんはトンネル作るのがうまいよね」など、遊びの中で友だちの得意なことに気付き、受け入れ合う姿が育まれつつある。その中には、友だちの意見に耳を貸さず、自分の思いを通して遊びを進めようとする子どももいる。友だちにも様々な考えがあることを知り、それらを受け入れられるようになってほしいという願いを持ちながらも、子どもたち同士がお互いに違うところも認めつつ育っていけるよう、支えていきたいと思った。

本研究をきっかけとして、R 児を様々な視点から見つめ省察を重ねたことで、友だちと関わろうとする R 児の気持ちの変化に気付くことができたのだと思う。年中の頃の R 児を「保育者から見ると、友だちへの興味関心がまだ薄いのではないかと感じられる子」と思っていたが、思い返してみると、その時期にも R 児は R 児なりの形で友だちと関わろうとする動きがあったのかもしれないと考えられるようになった。保育を振り返り、その時には見落としていた子どもの思いを拾い上げ、見つめ直す大切さを実感した。

子どもの行動は必ずしも保育者の予想通りになるわけではない。保育者の想定と実際の子どもの姿にずれがある場合には、それまでの保育経験だけにとらわれず、子どもの心の中を推し量りながら、そのずれに対して子どもへの理解を柔軟に変えていくことが大切であることを学んだ。